奇妙なことに、この青い石を見るたびに私は昔飼っていた金魚を思い出す。その金魚鉢の水面越しに見える景色と、このアクアマリンの光沢にはどこか通じるものがあるような気がするのだ。もちろん、それは私の勝手な思い込みであろう。しかし、この石を眺めていると、まるで時間が巻き戻され、あの穏やかな午後、金魚鉢のそばで過ごした静かなひとときに戻れるような気がしてならないのだ。

「アクアマリン（藍玉）」